

主 題：より多くの実を結ぶために 2

聖書箇所：ヨハネの福音書 15章1-8節

「この世に生を受けたからには何かを残したい」と、そのようにお考えになったことはないでしょうか？あるいは、ご自分の人生の目的や意義について考えられたことはありませんか？「もし、自分がこのまま死んでしまったら、自分の人生はいったい何だったのだろうか？」と。聖書のみことばは教えます。「もし、あなたがこの神のみことばに沿った歩みをするなら、必ず、神があなたの人生を通して確かな、価値ある実を結ばせてくださる」と。「あなたがより多くの実を結ぶために必要なことは何か？」について前回(07/2/11)から学んでいます。マタイ25:30にこのような神からのおことばがあります。「**役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ぎしりするのです。**」と。みことばがはっきりと教えることは、私たちは実は神のために存在しているということです。そこには「私たちがどう考えるか」ということは関係ありません。神こそが主権者であり、陶器のように私たちに造られた真の創造主なのです。前回のメッセージからかなり時間が経ってしまいましたが、それに続いて私たちは、このヨハネ15:1-8を通して、私たちがより多くの価値ある実を結んで行くために必要なことを、ごいっしょに学んで行きたいと思えます。

☆あなたがより多くの実を結ぶために必要なことは？

1. 主が与えてくださる訓練を喜ぶ 1-6節

少し前回の学びの復習をしましょう。私たちがより多くの実を結ぶために必要なことの第一番目は、主が与えてくださる訓練を喜ぶということでした。私たちのことをだれよりもよくご存じで、なおかつ、私たちにとって何が必要で何が最善なのか、そのことをすべてご存じの神が与えてくださる苦難やチャレンジを感謝をもって受け入れて歩んで行くということです。

いったい、どうして私たちは、神からの訓練を喜ぶべきなのでしょう？

1) それによって救われているということが分かるから

神から約束されている訓練、あるいは、試練を経験することによって、その人は「確かに自分は救われている」という確信を強めることができるのです。前回、特に、注目した箇所は2節の「刈り込みをなさいます」という部分でした。神はご自分のものとされた枝を「**もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます**」、つまり、もっと清めようとなさるのです。実は、ここで「刈り込みをなさいます」と訳されていることばの名詞形が、すぐ後の3節にも使われていて、そこでは「**あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。**」と訳されています。つまり、あなたがますます清められて行くということは、あなたがもう既に救われているという証拠でもあるのです。

2) それによって私たちが成長するから

どうして、私たちは神からの「刈り込み」、つまり、訓練を喜びとするのか、そのもう一つの理由は、それによって私たちが成長するからです。私たちは神からの訓練を経験し、それらを乗り越えて行くことによって、ますます清められ、より多くの実を結ぶことができるようになるのです。神はみことばだけではなく、様々な主の訓練を通して、私たちに成長させてくださいます。私たちに成長させようとする神の働きは、決して途中で止まることはありません。だから、イエスはこのヨハネ15:2で「**刈り込みをなさいます**」と言うときに「繰り返し繰り返し刈り込みをされる」という表現が使われたのです。つまり、神の訓練、言い換えれば、私たちの成長は私たちが天に上げられ、イエスにお会いするそのときまで続くのです。神はそのように私たちにいろいろな訓練や問題などを与え続けて行くことによって、私たちに必要な「刈り込み」を為して行ってくださるのです。「刈り込み」というものが、恐らくは、ぶどうの木にとって痛みを伴うのと同じように、神の与えてくださる様々な困難や訓練などにも痛みは伴います。でも、それが私たちにとっては必要なのです。それによって私たちがより成長させられ、いつの日かイエスの前に立つときに褒美となって返って来るのです。

ですから、私たちは、自分の前に降りかかってくる様々な困難、また、試練を私が成長するために神が与えてくださったのだと理解し、前向きに勝利して行く必要があるのです。それが、前回に学んだ内容でした。

2. イエスにとどまり続ける 4-6節 = みことばを守り行なう

私は「クリスチャンという存在は主に喜ばれる実を結ぶ（あるいは、結んで行こうとする）ことが大事である」とよく話します。それはそのようにみことばが教えているからなのですが、今回の箇所をよ

く観察して見ると、イエスはご自分の弟子たちが実を結ぶかどうかということよりも、少し別のことを気にかけておられるということが分かります。それはいったい何だと思われますか？ 4－6節の箇所をそのことを意識しながら読んでください。

4 **わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。**

5 **わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。**

6 **だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。**

お分かりになりましたか？ イエスがここで一番に訴えかけておられること、それは「イエスにとどまる」ということです。なぜなら、実は、それこそが「実を結ぶ」ために、絶対に必要な条件であるからです。ですから、私たちがより多くの実を結ぶために必要な第二番目のことは、私たちがしっかりイエスにとどまり続けるということ。今から見て行きましょう。

1) 「イエスにとどまる」とは？

今、見たように、「イエスにとどまる」ということは非常に大切なこととして話されてきました。なぜなら、これは①イエスからの命令であり（4節）、また、②実を結ぶかどうかの条件（4－5節）でもあるからです。また、もし、イエスにとどまっていなければ「**投げ捨てられ、枯れ…火に投げ込むので、それは燃えてしまう…**」（6節）とイエスが言われるように（これに関しては前回に学びましたが）、③私たちの救いにも関連することだからです。

4節で、イエスが「**わたしにとどまりなさい**」と教えていますが、では、この「イエスにとどまる」とは具体的にどのようなことを指すのでしょうか？もし、それが分からなければ私たちはこのイエスのメッセージの、それも十字架に磔になれる日の前夜に弟子たちに語られたそのメッセージの最も重要な部分を見過ごしてしまうことになるのです。

(1) 心の中だけの問題ではない

ある人は「信仰とはその人の心のものであり内面的なことだ」と考えます。ですから、「キリストにつながる」ということも、単に、そのような心情的なことと理解して、「キリストのことを慕わしく思うこと」であるとか、「いつも、イエスさまを覚えて祈ること」であるとか、「心の中で神はこのイエスだけだと信じ続けること」というように考えます。皆さん、お分りですか？つまり、行ないはいつでも良いのです。心の中でイエスを信じてさえいれば、無理して教会に行かなくても良い、行ないはクリスチャンらしくなくてもいいなどと考えます。でも、イエスはここで、この「キリストにつながる」ということをそのような意味でお話しになったのではないということは明らかです。なぜなら、そのように心の中だけでキリストにつながっているのなら、このヨハネ15章で語られている説教の後半にあるような迫害に関する予告や、そのようなことに対する警告や励ましなどは全く必要ではなくなって来るからです。

例えば、ヨハネ15：19「**もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。**」、ここでイエスは本当にイエスの「弟子」（ヨハネ15：8）であるなら、この世は、その弟子たちを憎むということを言われたのです。そのような警告は16章に入るともっと具体的に強烈になって行きます。ヨハネ16：2には、彼らが「**会堂から追放**」されたり、彼らを「**殺す者がみな、そうすることで自分は神に奉仕しているのだと思う時が来る**」ということイエスは言われています。また、ヨハネ16：33では、イエスは「**わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。**」ということ弟子たちに言われるのです。先程、話したように、もしも、心の中だけでキリストにつながっているだけなら、このような困難や迫害は回避できます。なぜなら、他人に知られないようにこっそりと心の中だけに留めておけば良いのですから。

確かに、信仰とはその人の心の問題であり、内側のことです。しかし、クリスチャンとはその内側（＝本質）が変えられた故に、神の前に正しい、良い実というものを結んで行くのです。私たちは内面が変わっていないのに、表面の行ない、体裁だけを変えようとするから辛くなって来るのです。実はこの当時、イエスが言われた「イエスにとどまり続ける」ということが非常に困難な時代でありました。というのも、皆さんもよくご存じのように、初めは、イエスの奇蹟を見たり、一見、目新しいような教えを聞いて、実に、多くの人たちがイエスのもとに集まりました。でも、大半の人たちは、興味本位や自分

の願い事などの理由だけでした。やがて、自分の期待していたものと違っていたり、困難や迫害などを経験するとイエスのもとを去って行ったのです。

(2) 「とどまる」と訳されていることば

実は、ここで「とどまる」と訳されていることばは、「とどまる」とか「滞在する」といった意味以外に、「残る」とか「(変わらずそのまま)続ける」という意味のことばで、持続や継続といった状態を表わします。つまり、イエスがこのメッセージを語った時、弟子たちに願っておられたことは「今、あなたがたが私のところに来ていること、みことばを聞いていることをそのまま続けて行きなさい！」ということなのです。この、「イエスにとどまる」とよく似た表現をヨハネは何度も記しています。例えば、ヨハネ 6 章です。ここで、イエスはあの「5000 人の給食」の奇蹟を行なった後で、ご自分が「いのちのパン」(ヨハネ 6 : 35) であると話しておられます。そのすぐ後で、このようなことを言われるのです。ヨハネ 6 : 56 **「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。」**と…。残念ながら、当時、このことばを聞いた弟子たちの多くは、イエスの語られた真意を理解できなかったばかりか、そのことばに失望してイエスのもとを去ってしまいました。しかし、今の私たちには、このイエスの教えがよく分かります。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む」とは、まさしく聖餐式のことです。私たちは聖餐式のときに何をしましょう？みことばは何と教えていますか？イエスの十字架とその犠牲を覚えて自分を吟味しつつ神に喜ばれる正しい歩みをして行くことです。言い換えれば、信仰とその実践を吟味すること、また、吟味し続けることです。

また、ヨハネ 8 章でイエスは「信じた(とされる)ユダヤ人たちに」このように言われました。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。」(ヨハネ 8 : 31)、ここでイエスは何を言われているのでしょうか？実は、「イエスさまを信じた」と言う者たちの中で、本当の弟子と、そうでない弟子たちがいるというのです。ある意味、本当に衝撃的な内容ですが、ヨハネはもとよりイエスもそのことを何度も教えてくれています。まず、マタイ 7 : 21 でイエスが、「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」と言われたように、残念ながら、「自分はクリスチャンで救われている！」と思っても、実は、救われていない人がいるかも知れないのです。だから、私たちは、その意味においても、しっかりと自分の結ぶ実というものを吟味する必要があります。というのは、イエスもその前節マタイ 7 : 20 で「こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。」と教えておられるからです。信仰を持つ(=救われる)ということは、バプテスマを受けることではありません。また、どこかの教会の教会員になることでもありません。何か、大きな奉仕をすることでも、教会で功績を残すことでもありません。

信仰とは、その人が神によって変えられることを言うのです。だから、ヨハネもこう教えるのです。例えば、I ヨハネ 2 : 6 に「神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。」とあるように、「神にとどまっている者」、つまり、救われた者はその行ないも変わるというのです。もし、あなたが本当に救われているなら、必ず、何らかの方法で、この福音を、救いのメッセージを語ろうとされているはずで、例えば、もし、だれかが「この礼拝堂が今にも崩れそうだ」ということを知ったらその人の行動は変わります。間違いなく、すぐにここから出ようとするはずで、「まあ、しばらく待ってから…」なんて悠長なことを言う人がいたら私たちはこう確信します。「この人は今の状況を理解していない」と。なぜなら、そのようなことは教えられなくても必ず分かることだからです。もし、行動が変わらないというのは、実は、本当は分かっているということなのです。

いずれにせよ、みことばが確実に教えていることは、一度主によって本当に救われた者は決して救いを失わないということです。そのことはヨハネ 10 : 28 で「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」とあることからはっきり分かります。

さらに、もう一つ確実なことは、だれであってもこの救い主イエス・キリストを信じるのがなければ、その人には確実に自分の犯した罪のさばきが待っているということです。みことばはこのように教えます。ヨハネ 3 : 16-18 「16: 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。 17: 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。 18: 御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。」、19 節以降で教えられているさばきとは、結局、その人の生き方のことです。生き方が変わらないのです。聖い神のもとに来ようとはせず、変わることなく闇を、罪を愛して行くのです。そうして、最後はヨハネ 3 : 36 「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとど

まる。」と、ここで「御子」、つまり、イエスを信じる者は「永遠のいのちを持つ」とありますが、その逆はどうでしょう？「御子を信じない者は…」と書かれていません。「御子に聞き従わない者は…」とあるのです。イエスを信じていないから当然、そのみことばにも聞き従おうとしないのです。そのような者の上に「神の怒りが」下るのです。

もう一つ、Iヨハネ3：6「だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪のうちは歩みません。罪のうちは歩む者はだれも、キリストを見てもないし、知ってもいないのです。」と、このように、確かに、イエスも、また、ヨハネも、ある意味において、行ないというものを重要視しています。それは、行ないがその人の信仰を明らかにするからです。聖書は決して行ないによる救いなどを教えてはいません。しかし、本当の信仰は、間違いなく、その人を変えるのです。なぜなら、神がその人を変えられるからです。このように「キリストにつながる」とは、心の中においてだけキリストとつながっていることでは決してありません。「キリストにつながる」とは、自分の信仰を言い表わしつつ、神に従って行くことなのです。言い換えれば「みことばを守り行なう」ことです。「みことばを實踐して行く」ということなのです。そのように本当に救われたクリスチャンは内面が変えられた故に、その行ないの変化が何らかの形で現われて来るのです。

3. 神様の栄光のためにすべてのことを行なう 7-8節

最後、三つ目のポイントを見て行きましょう。私たちがより多くの実を結ぶために必要なこと、それは私たちが神の栄光のためにすべてのことを行なって行くということです。

7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。

8 あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。

1) 祈り(=願い)がかなえられる条件とは？

まず、ここで初めに注目したいのは7節の最後にある「あなたがたのためにそれがかなえられます。」ということばです。ある人たちは、「本当に何でもおできになる全知全能の神なる方がおられて、その神を信じるなら救われると聖書が教えているのだったら、クリスチャンの願い事は皆、叶うのではないですか？」とそのように言われます。その意味においては確かに、私たちクリスチャンたちの願い事を神は聞いてくださいます。しかし、そこには条件があります。

(1) 信仰の有無

まず第一の条件は、7節に「あなたがたがわたしにとどまり…」とありますが、これについてはもうすでに見ました。行ないの伴った本当の信仰の有無のことです。というのは、実は、本当に救われていないのに「自分はクリスチャンだから、救われている！天国に行ける！」と勘違いしている人が少なからずいるからです。ここで、イエスは「しっかりとぶどうの木につながりなさい！」ということをおられるのですが、実は、一見ぶどうの木につながっているように見える枝でも、その実、本当は幹につながっていないものがある。そういうものは投げ捨てられて燃やされてしまう、ということをおられるのです。本当に、信仰が有るのか無いのか、それは大きな問題です。というのは、その問題がはっきりしないと、この時にイエスが語られたメッセージが正しく機能しないからです。そればかりでなく、救われていると思っていたその人は、「自分は天国に行ける」と安心していただけなのに、それとは全く逆の、永遠の苦しき、永遠のさばきに至ってしまうからです。だから、イエスもこのようなときに、いろいろな言い方をすることによって、しっかり自分の救いについて吟味するようにと教えておられるのです。

(2) みことばに従っているかどうか

次に、もう一つの条件を見てみましょう。先程の「あなたがたがわたしにとどまり…」に続いてこのように記されています。7節「…わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、」と。ここでイエスは、先程の条件と全く違ったことについて話されているのでしょうか？この7節で、イエスは初め「わたしにとどまり…」と話されたのに、ここでは「わたしのことばが…とどまるなら…」というように変わっています。「わたし」が「わたしのことば」に変わっていますし、「あなたがたが…」とあったのが「わたしのことばが…」とあるように、主語が入れ代わっています。これは、原語でも全く同じです。通常、私たちもこのようなことを話す場合、しかも、ほとんど同じような表現を繰り返して使う場合は、同じようなことを、さらに詳しく、あるいは、強調して話そうとします。これはこういうことです。イエスが言われる「わたしのことば」とは「みことば」のことです。みことばが私たちにとどまるなら…ということは、私たちがしっかりみことばを覚え、そのみことばを實踐して行こうとしている、ということなのです。

本当に神によって救われた信仰者は変わります。神がその人を変えてくださるのです。だから、その人は神を愛するし、神を愛する故に神に喜ばれることをして行きたいから、神から出たみことばを愛するのです。だから、ヨハネもこのように教えています。Iヨハネ4：20-21「:20 神を愛すると言い

ながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。：21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。」と、このようにヨハネは「神を愛するものは必ず変えられている」ということを言うのです。そのすぐ後の I ヨハネ 5：1-3 で「：1 イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。：2 私たちが神を愛してその命令を守るなら、そのことによって、私たちが神の子どもたちを愛していることがわかります。：3 神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。」と続くのです。本当に、救われた信仰者は神から生まれ出た者であるから、その同じ境遇にある兄弟姉妹を愛するし、そうすることによって自分たちが救われているという確信も強まると教えるのです。

ですから、どうぞ、自分自身に問い質してみてください。「私は本当に神を信じているか？みことばを愛し、みことばに従って行きたいと願っているか？」と。他人と比べる必要はありません。また、何らかの基準に達しているかどうかも関係ありません。要は、あなたのうちにこの神を第一にして従って行きたいという気持ちがあるかどうかです。そして、そのような気持ちがあるなら、どうぞ、そのまま、歩んで行かれることです。そうするとき、神はあなたに次のステップを示してくださるでしょう。

(3) みこころを求め

祈りが叶えられるための第三のステップを見てみましょう。実は、それこそが今日の「多くの実を結ぶための第三番目のポイント」でもあるのです。だから、7節に「**あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、**」とある後、そのことが命令形で書かれています。「**何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。**」ということばです。これは、例えば、新しい車が欲しいとか、新しい家が欲しいということではありません。というのは、いつもそうですが、このようなことばが出て来るまでの流れを無視してはいけません。ここまでにイエスが言われたことは「**あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら…**」、つまり、あなたがたが、①本当の信仰を持ち、②心から神に、神のみことばに従って行こうとするなら、③願い事をしてご覧なさいということなのです。本当に救われた信仰者が、また、心からみことばに従って行こうとしているクリスチャンが「では、神さま、あれをください、これも宜しくお願ひします」などとは言いません。クリスチャンは間違いなく神の前に正しいことを、言い換えれば、神のみこころを求め、神もそのようなクリスチャンに対して、神のみこころというものを示してくださるのです。だから、ピリピ 2：13でも、「**神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。**」と教えているのです。つまり、もし、あなたが神の前に正しい歩みをしているなら、あなたには神のみこころが示されます。だから、その願いが叶えられるのです (I ヨハネ 3：22、5：14 など)。しかも、それは「**あなたがたのために**」(ヨハネ 15：7) とあるように、私たちの益にもなるのです。

(4) 神の究極の目的

でも、それは神の究極の目的ではありません。神の究極の目的は8節「**あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。**」ということばです。つまり、神の栄光です。なぜなら、神はこのためにすべての創造のみわざをなされたからです (イザヤ 43：7 など)。

この8節の「**あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。**」というのは、一つ一つが密接につながっています。つまり、その逆も成立するのです。①あなたがたが実を結ばないなら、②わたしの弟子ではないから、③わたしの父は栄光を受けない…ということばです。それは、初めに引用した聖句、マタイ 25：30のように「**役に立たないしもべ**」だということばです。もし、あなたに何か責められる部分があるなら、どうぞ一日も早くそのことを悔い改めてください。また、私たちの信仰がいつの間にかことばだけの表面的なものになってしまっていないかどうか、また、心の中だけのものに成り下がってしまっていないかどうかです。しっかり、神を、みことばを最優先にしているだろうかということを、あなたは吟味しなければなりません。

そして、最後に、神のみこころを求め、それに対して忠実に歩んでいるかどうかです。もし、私たちがこのような点で責められる者でなければ、例え、周りの人がどのように評価しようとも、神はあなたを通して実を結んでくださいます。神があなたに問われるのは、あなたが神に対して「**良い忠実なしもべ**」(マタイ 25：21、23) であるか否かです。もし、あなたが神の前に忠実なしもべであるなら、そのようなあなたを通して、神は必ず何らかの実を結んで、神のすばらしさを現わしてくださいます。いったい、自分を通してどのような実が結ばれるのかと心配する必要はありません。私たちがまず気にかけるべきことは、本当の幹であるイエス・キリストにしっかりつながっているかどうかということです。あなた自身、しっかりとみことばを守り行なっているかどうか、みこころを求め、そのみこころに従おうとしているかどうか、そのことをぜひ吟味してみてください。